

小林功著

『生まれくる文明と対峙すること』

——7世紀地中海世界の新たな歴史像——

田中悠子

評書

六三〇年代アラビア半島から打って出たアラブは破竹の勢いで拡大し、東のサーサーン朝、西のビザンツ帝国という長きに亘る勢力図は崩れた。サーサーン朝は崩壊し、ビザンツは領土を喪失しつつアラブへの対応を迫られることとなった。本書はそんな激動の七世紀東地中海世界のスペクタクルをビザンツ帝国がどのようにアラブと対峙したかという視点から論じ、帝国が「他者との対峙」の中で変容していく様を描出する。最大の特徴は、従来研究史上での注目度が低いコンスタンス二世期に焦点を当て、「ローマ帝国」から「ビザンツ帝国」が現出する転換点としての重要性を論じる点である。ビザンツ政治史の顕学たる著者の浩瀚な知識が遺憾なく発揮され、複数言語史料の広汎な活用や諸分野の研究成果の援用によって史料の乏しさという困難が補われる点、各論点で最新の研究動向を踏まえた議論が提供され当該時代が大きな文脈の中に描出される点は正に鴻業と言うよりない。更に評者のようなイスラーム初期史の学徒にとつては、初期アラブ軍の

動向が多種の史料から具に再構成される点でも貴重な研究である。以下、まずは各章の内容を紹介し雑感を交えた上で最後に全体に関わる論点を述べることにするが、評者の専門上、主にイスラーム側視点からの論評になることを予め断っておく。ビザンツ史やその境域史の視点からはより優れた論者からの批評がある。なお「アラブ」の呼称には問題もあるが、序章注三にある通り本書では便宜上の呼称として用いられており、本稿はそれに倣う。

—

序章「研究史と問題設定」で著者は、文字史料が極めて限られる七世紀から九世紀初頭研究の困難さと、中央政府の主導性を等閑視してきた研究動向に触れ、コンスタンス二世期への理解が不十分な現状を指摘する。しかし、近年に利用可能となった史料の増加や既存史料の再評価、考古学や環境史からの新たな知見によって多角的アプローチが可能になったとし、この時代（七世紀中盤）を新勢力アラブとの対峙という視点から再分析し、古代末期の長期的変動の中に再定義することを本書の目的として掲げる。

第一章「神の怒りを引き起こした皇帝」は、コンスタンス二世期の前提としてヘラクレイオス帝の治世を概観する。対ペルシアの戦勝で得られた皇帝の宗教的權威は、両性論をとるカルケドン派と単性論をとる非カルケドン派の融和のため提唱された単意論への反発やアラブへの敗北で早くも揺らぎ、治世末期の六三〇年代末に「ヘラクレイオス的」な対アラブ方策（休戦協定を含む融和の方策）から息子コンスタンティノス三世が志向した強硬路線（協定を結ばず積極的に対峙する方策）への転換がなされたとい

う。なお、この頃のビザンツ帝国は、アラブの侵攻を、従来からの周縁部の人々の一時的な略奪活動と同等のものとして看做しており、この時点で対アラブ策はその脅威が短期的なものだとの認識に基づいているという。

第二章「六四一年」『四皇帝の年』の混乱」は、ヘラクレイオス帝の死後、その路線を継承した皇妃マルティナとその子供たち、そしてそこから距離を取るコンスタンティノス三世という対立構造を概観する。これには総主教に近い前者とそうではない後者という側面もあった。コンスタンティノス三世の死とマルティナの失脚後、父の強行路線を継承する者として単独皇帝となったコンスタンス二世は、失墜した権威と宗教問題を負の遺産として引継ぎつつ、アラブへの対峙を余儀なくされる。このように、コンスタンス二世の治世を通史的文脈の中に捉える視点が本書を貫く。

第三章「維持される強硬路線」は、前述の強硬路線が六四〇年代を通じて維持されたことを論じる。軍を積極的に境域やアラブ支配領域に展開させる一方で、小アジアに侵入したアラブ軍には容易な進軍を許しており、後のテマ制に繋がる防衛戦体制がまだ整っていないことが示唆される。この頃よりアラブが単なる短期的脅威ではないとの認識が広がり、この認識はビザンツ帝国内部での皇帝批判を喚起したという。

なお、著者はビザンツが劣勢であったにも関わらず領土を大きく喪失しなかった状況を「奇妙な均衡」と呼び、この理由をアラブが「本気を出していないかった」ためと説明する。ただしここには、アラブ軍にとって、遠征が戦利品や貢納金、捕虜の確保を通して富を得る手段であった点が補記できよう。アラビア語で遠征

を表す「ghazw」の語は一般に、略奪を目的とした侵入の意味合いが強い^②。最初の大征服の後のアラブがビザンツ領土の奪取をそれほど意図せず、略奪行に注力したことは従前から指摘される通りであり、肥沃な（即ち税収の高い）イラクからエジプトを既に征服したアラブにとって、小アジアや北アフリカについては、本気の如何に関わらず、領土より略奪に意味があったとの見方も可能だろう。サーサーン朝領の場合は地方の独立性が高かった上に中央政府が瓦解したため、各地での和平が征服に繋がった（ただし、アラブの支配は長らく税や貢納金接収による間接支配に留まった）。対してビザンツ領の場合、略奪や貢納金接収を終えてアラブが去れば、その地はビザンツ支配下に戻る。征服が進まなかった背景には、そうした事情があるのではなからうか。

第四章「最初のコンスタンティノール攻撃」は、地中海に進出したアラブとビザンツの海上での戦いを扱う。艦隊によるキプロス遠征を成功させたアラブに対し、ビザンツ帝国は強行路線を維持できず、六五一年頃から三年間の和約を結ぶ。そして和約が失効した六五四年、アラブ艦隊は満を持してコンスタンティノール攻撃を仕掛けたものの、暴風雨のため失敗に終わった。この出来事は、アラブ軍初の「敗北」、そしてビザンツ帝国にとって大きな「勝利」となり、双方に転機をもたらしたという。

評者にとって興味深いことに、六五一年の和約や六五四年の攻撃はイスラーム側の史料には現れない。和約については期間中の六五二／三年にムアウィヤ軍がボスボラスに達したことが数点のアラビア語史料に述べられ、うち一つは、その翌年にもビザンツ領への遠征があったことを伝えている。本書が述べる和約の存

在や時系列との整合性に関心が深まるどころである。^④

六四五年のコンスタンティノープル攻撃は更に要注意で、セベオスを唯一の典拠とする本件は、研究史上、扱いの難しい出来事とされてきた。本件の史実性に光をあてたオサリバンは「未だ多くのの人にとって疑わしいものの、このことは無視されるべきではない」との慎重な主張を行っている。イスラーム史料の沈黙については、不首尾に終わった攻撃が意図的に無視されたとして、本件に関係すると考えられる記述や事象を傍証として挙げる。しかしその議論は推論による部分も多い。^⑤なお、先行研究では殆ど注目されないものの、右に述べた六五二／三年のボスボラス遠征が本件と何らかの関わりを持つ可能性はあるが、その場合、然るべき議論の上で年代の整合性をつけねばなるまい。このような状況を踏まえ、史料の曖昧性や年代指定の難しさ、研究史上の議論について、今少しの解説があればと感じられた。

また、六四九年までアラブが海上進出しなかった理由については、著者はその頃までアラブ軍がサーサーン朝領征服に忙殺されていたためと説明する。しかし、ここでの典拠もセベオスのみであることに注意したい。後述の通り、サーサーン朝に纏わるセベオスの記述には留保が必要なためだ。視点を変え、当時のアラブ勢力内部の変化に目を向ければ、六四四年にウマイヤ家のウスマーンがカリフに就任し、その腹心で翌年エジプト総督となったアブドゥッラー・ブン・サアドが後に、アレクサンドリアを拠点とするアラブ艦隊の将として活躍することになる。同じ頃、もう一つのアラブ艦隊拠点となるレバノンでは、カリフと同じウマイヤ家のムアウィヤが着々と足場を固めていた。レバノンとアレ

クサンドリアを二大拠点としたアラブ艦隊活躍への布石は、六四〇年代半ばに既に打たれていたと言えるのではないだろうか。

評者の関心から思わず些末な点に言及したが、アラブ艦隊の地中海進出がその後の軍事／政治に転機をもたらした点に疑問の余地は無い。その後コンスタンス二世は、アラブの内乱でできた猶予を利用し、諸々の政策を打ち出していく。

第五章「コンスタンス二世のシチリア進出」では、コンスタンス二世の治世後半を特徴づける「シチリアへの移動」が検討される。著者はこの移動の目的を、北アフリカに侵攻するアラブへの対処であったと考える。『教皇の書』における「艦隊税 (naviclay tax)」の語から艦隊創設が考察され、東方領域に目を配るコンスタンティノープルのコンスタンティノス四世とシユラクサから西方領域に対処するコンスタンス二世という、複数皇帝の並立体制が一時的に復活したことが指摘される。シチリア艦隊創設の論拠がただ一つの史料に現れる「艦隊税」の一語のみであること、この語への検討がなされないことが気にかかるが、コンスタンス二世の行動を西方との関係の中で考察する視野の広がりには読者を圧倒する。

第六章「神が振り下ろした一撃」では、六六〇年代に第一次内乱を終結させたアラブが攻勢を強め、特に小アジアを徹底的に蹂躪したことが述べられる。この状況はアラブ軍がコンスタンティノープルを目指して急進した六五四年とは明白に異なり、著者は、海戦敗北と内乱を経たアラブには六六〇年代前半においてはまだ十分な艦隊が無く、差当り陸路での蹂躪によってビザンツ領を疲弊させる策がとられたことを推測する。一方、ビザンツ側にも変

化が見出される。嘗ては小アジアに侵攻したアラブ軍への抵抗が看取できなかったのに対し、六六〇年代には住民が一九となって抵抗する例が見られるのである。これには複合的要因があるが、著者は六五四四年の「勝利」が人々の士気を向上させた点を強調する。ただし、ここで読者は、第四章の要約に付して指摘したように、セベオスのみが伝える六五四四年の出来事には若干の留保が必要な点を頭の片隅に置くべきだろう。また「士気」に関する典拠はほぼ「マロン戦記」のみであるため、その史料性や、この事象を一般化する根拠について今少し解説があればと感じられる。

第七章「守勢から攻勢へ」では、従来六七〇年代の出来事と考えられていた第二回コンスタンティノブル攻撃の時期が、先行研究の整理を通じて再検討される。近年注目されている史料で本件が総主教トマス二世在任期間中に起こったとされる点を主軸に、六六七〇九年とするヤンコヴィアク説が採用される。これを踏まえて著者は六七〇年代をも概観し、この頃からビザンツ艦隊による海での反撃が始まっていくとした上で、この艦隊こそがコンスタンス二世により創設されたシチリア艦隊であると主張する。

第八章「コンスタンス二世の暗殺をめぐる」は、前章で比定されたコンスタンティノブル攻撃の時期がコンスタンス二世の暗殺時期と重なることを踏まえ、その背景が再検討される。先行研究は東方との関係性を念頭に置くが、著者はこの事件をむしろ西方領域の文脈の中で分析されるべきであると考え、艦隊創設等に伴い負担が増える反面、十分な成果が得られていない状況への不満が噴出した、一種のクーデターであったと解説する。

その最期が象徴する通り、コンスタンス二世の治世は内外の敵

との戦いの連続だった。しかし、その中で打ち出された諸政策、特に艦隊や防衛戦略はその後の時代に大きな意味を持つことになるという。また数々の肅清により古代末期の政治を象徴する元老院議員貴族が姿を消し、新たなエリート層が姿を現す。このように彼の治世は、帝国の新たな局面への過渡期として総括される。

第九章「ローマ帝国の『後継者』になること」では、他者への認識がビザンツ帝国（またアラブ）の自己認識にどう作用したかが検討される。当初アラブは一時的に隆盛した蛮族集団としか見られていなかったが、彼らが強大で持続的な「国家」であることが明白となるにつれ、その「他者」性が強く認識された。転機は六五四年のコンスタンティノブル攻撃であり、ビザンツの奇跡的勝利により、動揺していた皇帝の宗教的權威が復活を遂げる。その後帝国は、神の加護を受けた皇帝を頂くキリスト教徒共同体としての「ローマ帝国」の自己像を強めていく。一方のアラブも、存続する「他者」としてのビザンツ帝国を意識せざるを得なくなると、そのために独自の文明を創出していくことになったという。

「ローマ帝国の後継者」を巡ってビザンツとアラブを対置する著者の視点は示唆的である一方、そもそもアラブがその地位を指していたのかという点は検討を要する。本章でそのローマ的要素が強調されるムアウィヤ即位の式典には、著者も言及する通り、王冠の拒否や臣従の誓いという独特の要素が見られ、既に独自の君主像が表現されていると見ることも可能だ。「後継者」との象徴的表現の真意についても、より詳しい説明が求められよう。また、アラブ側の後継者意識として対置されるサーサーン朝については、「サーサーン朝を『過去』とした主体は誰か」を考えな

くてはなるまい。例えば本章注七六で言及されるニザーム・アル・ムルク著『統治の書』には確かにサーサーン朝君主への憧憬が看取されるが、この作品はイランを中心に勃興しペルシア語での著述活動が行われたセルジューク朝の文化的背景の中で著されたものであり、ここにイラン的意識が反映されるのはある意味で自然である。サーサーン朝という「過去」を持つのは一部地域であり、それを「イスラーム世界」全体の現象として論じることには注意が必要ではないだろうか。

終章「七世紀中盤とはどのような時代だったのか」は、近年の研究成果を踏まえつつ、コンスタンス二世の治世を長期的文脈の中に位置づける。①都市の衰退、②土地所有者の台頭、③非カルケドン派の離心といった状況から六世紀後半までにビザンツ帝国では嘗てのローマ帝國的な一体性が揺らいでいた。アラブの勃興で帝国は縮小するが、逆説的には離心傾向の強い諸属州が削ぎ落とされ、カルケドン派及びギリシア語の優勢な国家との輪郭が明確になるとともに、神の守護と皇帝の権威が改めて意識されることになったという。このように古代末期の時代いうねりや帝国——周縁の文脈の中で（東）ローマの領域から「ビザンツ帝国」的國家システムが立ち上がる様を描出し、本論は閉じる。

補論一はコンスタンス二世のアルメニアとの関係を検討し、補論二はコンメルキアリオス職の分析をもとに領土喪失に伴う行政・軍事システムの転換を考察する。補論三は独特の特徴を持つ部隊オプシキオンの起源、補論四はコンスタンス二世の没年を巡る議論を概観する。

二

斯くの如く、本書は歴史の転換期とその文脈を宏闊な視野の下に再構成する試みであり、コンスタンス二世の治世に新たな光を照射しようとする著者の熱意が随所に光る。人々の「認識」にも踏み込みつつ、失墜し復活する皇帝の権威、帝国の制度的・領土的変化に触れ、ビザンツ帝国の新たな誕生を描く手腕は正に圧巻だ。とはいえ多岐に亘る議論と時代の複雑性、そして恐らく紙幅の関係により、論じ尽くされない点も見出される。上記では要約に付して各章に関わる所感を述べたが、以下では本書全体に関して評者が見出し得た論点について手短に述べたい。

〈史料論〉本書の手法は多言語に亘る史料の活用であり、適宜引用される文献によって読者にも議論の展開が追いやすくなっている。一方、史料性への言及が殆どなされないことは惜しまれる。第四章の議論を例にとれば、六五一年の和約についてセベオスとテオフアネスという時代・言語・立場の異なる著者による記述がその性質や細部の異同の検討なく並置され、和約締結を示す点のみが取り上げられる。セベオスは六五四年の攻撃という重大事件に関する唯一の典拠でもあるが、アルメニアという複雑な土地から見た歴史観が濃く反映され、サーサーン朝に特段の関心が示されていること、著者の曖昧さなど、読解において留意すべき点がある。セベオスのみならず、全ての史料は固有の歴史性を持つが、各史料の性質に関する十分な情報と批判的検討が本書を通じて提示されているとは感じられなかった。また「艦隊税」や「異教徒／異端者」など特殊な用語が検討を経ずに論拠として導入される

点も議論の強度を減じており、史料・用語使用の厳密性の追求に今少し紙幅が費やされていれど感じられた。イスラーム側史料については、議論の裏付けとしては言及される一方で前述の和約のように不整合の点には言及されず、マムルーク朝期のヌワイリーなど、かなり後世の史料が補記なく参照されるなどの要注意点が見出される。

〈アラブ勢力の内情〉ビザンツ帝国とアラブ勢力の対峙を主題とする本書であるが、そこに注目するあまり時にアラブの内情が斟酌されない傾向も見られた。例として以下の二点を挙げる。

一つめはアラブの第一次・第二次内乱の解釈であり、著者はこの要因をビザンツへの敗北による動揺と見る。しかし、第一次内乱については敗北を「遠因」とするに留めるホイランドの見解（一〇三頁）が本書の議論が進む中で段々と強調されていく（一〇八頁、二二四頁）ことや、第二次内乱についてはそもそも根拠が示されない（一七五頁）ことに違和感が生じる。二二四頁で参照されるブランキンシップの著書はウマイヤ朝末期に主眼を置いたもので、それ以前の時代における遠征の停滞とイスラーム社会の混乱を具に論じたものではない。より一般的な理解では、これらの内乱は共同体が最初期から抱えていた歪みや富の再分配を巡る不満、ウマイヤ家への反感から噴出した、共同体指導者の資格を巡る争いと捉えられる。著者の言う通り、ビザンツへの敗北が関わっているのだとしても、共同体内部に要因を見出す解釈が一般的である以上、それに言及することも必要ではなからうか。

二点目として、本書は七世紀末から「アラブ」や「ムスリム」意識が明確化していく理由を、ビザンツ打倒の失敗により、アラ

ブにとってビザンツが「他者」化したことに求める。しかし「アラブ」意識形成を論じる際には非アラビア語話者が多数を占める征服地に植民したアラビア半島出身者の漸次的自己認識獲得を考える必要がある^⑦し、行政におけるアラビア語使用の促進は、第二次内乱後の国政整備との関係が指摘されている。「ムスリム」意識についても、内乱後に改めて強化された終末論的メッセージとの関係性を考える必要がある^⑧。

「対峙」の諸相を詳らかにしようとする著者の意欲の裏返しかもしれないが、当時アラブが直面していた事態の説明を対ビザンツ戦線に求めすぎることにより、イスラーム初期史の諸側面が見落とされはしないかとの危惧も感じられた。

『文明』との『対峙』とは本書が目惹く理由の一つはハントントンをも思わせるその壮大な書名である。文明などという大きな言葉は評者の扱いうる範疇を超えるが、この書名からは文化、制度、思想体系などを網羅する多層的議論が予期されよう。

ただし、本書の視点はあくまで軍事的衝突とそれに対するビザンツの対応であり、生まれくるアラブの「文明」が何なのかはあまり論じられない。「文明」同士の「対峙」の問題は、双方の内情に触れつつ、より多面的に議論されるべきではなからうか。然るに本書は、軍事的衝突のみならず、形成されゆくアラブ＝ムスリムの国家、文化、思想をビザンツの人々がどのように眼差し、それが帝国内部にどのような変化をもたらすか（その逆も然り）という、アラブとビザンツの対峙の諸相を巡る更なる研究の契機となろう。このような視座は既にブリル社の *The History of Christian-Muslim Relations* シリーズなどに詳しく扱われている

ものの、本邦では未開拓の分野である。その扉を開いた本書に改めて敬意を表したい。

以上、七世紀東地中海世界への新たな見方を提示せんとする意欲作を前に、雑駁な感想を述べた。著者により再構成された歴史像の詳細さに圧倒される一方、異なる当事者間の内情に留意しつつ多種の史料から史実を見出す難しさについても、改めて考えさせられた。自明のことながら、史料が提示するのは「起こったこと」とよりも「その認識・利用」である。セベオスの伝えるコンスタンティノール攻撃について他の史料が沈黙するように、ある事象がある史料が強調し、他の史料は無視するといった情報の差異から、何を読み取るべきか。多様な視線が交差する時代・地域を研究対象とする学徒に対し、本書は重要な問いを投げかける。

本書の面白みは、勃興するアラブの前に新たな形で誕生するビザンツ、そのビザンツによるアラブへの影響という具合に、行きつ戻りつする「他者」性の照射の中に歴史を捉える点である。この時代、西方にも無視できない勢力が頭をもたげていた。地中海の東西でビザンツ帝国が経験していた「対峙」を軸にすれば、「他者」性の相互作用を巡る総体的な地中海世界像が浮かび上がるのではないだろうか。著者の次なる著書に期待が膨らむばかりである。

- ① 仲田公輔『史学雑誌』一三〇編二号（二〇二二年刊行予定）の他、根津由喜夫による講評が Researchmap 上に公開されている。【https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/425190/0840265684e093cfd25c639411559697?frame_id=896770】二〇二一年一月九日閲覧】。

- ② Cook, D. B., "Chazw", in: *Encyclopedia of Islam THREE*. http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_ei3_COM_27455 二〇二一年一月五日閲覧】

- ③ Cf. Wellhausen, J. "Arab wars with the Byzantines in the Umayyad Period", in: *Arab-Byzantine relations in early Islamic times*. Ashgate/Variorn, 2004, p. 31.

- ④ Gordon, M. S. *The Works of Ibn Wāḥib Al-Ya'qūbī: An English Translation* III. Leiden, 2018, p. 809. Humphreys, R. S., *The history of al-Ṭabarī. Vol. 15 : the crisis of the early caliphate*. Albany, 1990, p. 94. Khallab b. Khayrā. *Tarīkh Khalyān b. Khayrā* I. Damascus, 1967, pp. 177-8.

- ⑤ O'Sullivan, S. "Sebeos' account of an Arab attack on Constantinople in 654", *Byzantine and Modern Greek Studies* 28 (1), 2004, pp. 67-88.

- ⑥ ケネディは臣従の誓いのアラブ性を強調する。Kennedy, H., *Caliphate: the history of an idea*. New York, 2016, pp. 35-6. (以下、Kennedy 2016).

- ⑦ Web, P., *Imagining the Arabs: Arab identity and the rise of Islam*. Edinburgh, 2016, pp. 110-73.

- ⑧ Kennedy 2016, pp. 47-8.

- ⑨ フレッド・M・ドナー（後藤明監訳）『イスラームの誕生——信仰者からムスリムへ』（慶応義塾大学出版会、二〇一四年）二〇一頁～三二頁。